

まちづくり懇談会議事録

日 時：令和 3 年 11 月 15 日（月）18：30～20：12

場 所：桜山会館

出席者：7 人

1. 開会

2. 町長挨拶

※配付資料確認および日程説明

3. 懇談

（1）第 7 次総合計画の策定について（別紙 1・2 参照）

（2）自由懇談

4. その他（情報提供）

（1）国民健康保険税・介護保険料・後期高齢者医療保険料の減免について（別紙 3 参照）

5. 閉会

《懇談内容》

【自由懇談】

町民：農業生産基盤について、土地改良総合センター設立とは具体的にどういった施設か。

町長：来年度から令和 16 年度までなので、12～3 年の間で 10 地区ぐらい、重なるところもあります。土地改良整備事業が栗山町内で動き出すものなので、それで北海道から、なかなか今の北海道の人材だけでは難しいということで、地元に進捗する体制を作ってほしいということでありまして、今、改良区さんと農協さんと準備委員会を作ってそれぞれ人材を出し合って、さらに栗山の場合南部耕地出張所もあるので、道の機関とも連携して、そのセンターを作る。具体的にはまだ道とすり合わせていませんが、北海道の職員がやるようなことも一部担っていくようなセンターを予定しています。例えば換地をやるとか、その前の計画づくりから地域との調整、あとは事業に絡んでいくものをほとんど担っていくというか、道と連携を取って一緒にやっていくというイメージのセンターの設立を今目指して準備段階ですけど、協議を進めているところです。先ほど言いましたが、250 億ぐらいの道費が入るということで、それがちょうど、御園や北学田、富士、そしてその後の雨煙別、鳩山だとか、以前に改良事業が入っていました。それが、期間が大分過ぎまして、またやり直さなければならない状況になってきているらしい。ですので、改良区さんの方とも連携を取りながらということになるかと思いますが、ここ桜山の方はまだ実際入ってからそんなに期間が、10 年ぐらい経ちましたか。ここに挙がっている所はもったかなり経っているはずですね。これから予定があるところは改良区の管轄だと思います。ここの地域は山が近いので改良区は一部ですよ。正直やりたいところは改良区じゃない方をやりたいですよ。山の地域なので、僕もかなりのお金掛けましたけど。前に補

助などがあつたのです。畑作構造の補助とか、今はないのかなと思っていました。今もやはり面積要件を満たさなければならぬので、それができない地域、例えば栗山町の三日月の方などが一部あります。そういうところの例えば畑地の暗渠を変えたり、基盤整備する時は、僕が聞いた話ではその7割ぐらいの補助で、3割はその受益者の持ち出しになってしまう。道営事業であれば、数パーセント。負担が11.25%とか、それで町が出しても負担はもっと少ないので、かなりの個人負担率になるので、やりたくてもやれないんだというような話を聞いたことがある。そこは改良区さんとも、協議をしながらやることになります。

町民：多分人口も減っていくし、一軒当たりの面積も広くなるので基盤をよくしないとやっていけなくなるんじゃないかというのが実感です。

町長：僕も同じ考え、気持ちであります。やはり、十数年前は平均経営面積が12,3haだったものが、年を追うごとに後継者もいなくて、農家戸数が半分ぐらいになっているわけです。700戸から420戸ぐらいですか。それと反比例するように。経営面積は12,3haから、今22,3haぐらいまでになりますので、大規模化が進んでいる。そんな中で、やはり作業効率を向上するためには、基盤整備が一番大事になってくるかなと思っている。そこは順番もあるかもしれませんが、ずっと進めていくべき事業かなと思います。

町民：現実、今公社で低コスト事業があるんですけど、補助率は低いかなと。需要ある事業なので、もうちょっと出してくれてもいいのかなと思うんですけど。今年も使ったんですが、申込者が多くて削減された。

町長：そこも今協議会の方で検討されていると聞いてます。やはり元となるお金は中山間と多面的な関係もあるのかな。その中での範囲の事業の組み立てなので、整理していくと、その部分が多くなると全体的に補助率が下がることになっていますので、これからみんなで検討していかなきゃダメかなと思っています。

町民：介護学生は何人いるんですか。

教育長：介護学校については、定員40名で大体30人弱の学生が通ってきています。ですから、定員には大きく割れている状況です。来年度につきましても、20ちょっと、この後また試験もありますが、大体見込まれているのが25～27というところです。この部分については毎年の課題と聞いており、私が校長をやっていた時代も同じような課題を抱えながら進んできたので、なんとかこの辺を道内のいろんな介護学校を持っている都市、今札幌の医療大学、介護科ができてしまったので、もうこれは資金源で言えばタンカーに漁船でぶつかりに行くような形の資金力の差があります。そういったところとどう対抗できるかということで、今道内に20ぐらい介護学校を抱えているところあり、公立という意味では本校のみですが、そういうところと手を携えて対策も打っていかねばならないかなということで、今徐々に動き始めました。そういったことも含めてなんとかこの部分は栗山町もそうですけれども、福祉の町という事で介護従事者というのは非常に宝ですので、その部分に結びつけていけるような事業として考えていかねばならない。多額の事業額をかけるわけにはいかないの、なんとかコストを抑えながら、何とかそこに結び付けていこうと思って取り組んでいる最中です。国の方の事業もありますので、そこと絡める部分は研究し始めています。そこについてはもう少ししたら皆様にもお知らせできる段階が来るかというふうに、各大学関係にも今協議を進めていますので、そういったことも含めて新たな取り組みにチャレンジするつもりで取り組んでいる最中です。

中途半端な言い方でこういう取り組みなんですと今はまだ言える段階ではないので、実際もう取り掛かっているということだけは確かです。

町民：なんか 4000 万ぐらいの赤字だと聞いたんですけど。それをずっと続けていくと、10 年も続けていくと 4 億円ぐらいになりますよね。

教育長：その辺を打破しなければいけないという事で、今計画を立てて具体的に動いているところです。

町民：生徒もいなくてそんなに費用がかかる。いくら福祉の町とはいえ、どうなのか。

町長：言われることは最中です。ただ、町長就任当時から 5 つの町政課題を挙げて、そのうちの 1 つが介護学校の存続問題というのを挙げていました。それで、その時一学年 80 人定員だった。それを去年から 40 人に落とした。そうしないと教員の体制も縮小できない。それで経営改善したのですが、それでも 40 人にしても今教育長が言ったように、もう 20 数人ぐらいの入学者数しかないという事で、さっき 4000 万と言っていたんですが、実は今年は 8000 万ぐらいの赤字の投入です。ここ数年前この介護人材の確保については栗山だけの問題じゃない。日本の問題です。それで、もう 3 年後には、全国で 35 万人の介護人材が不足すると言われて、北海道も 2 万人の介護人材が不足する。栗山町も不足します。ですから、なんとか介護人材を確保するために国は、外国人材の活用だとか、資格者で働いていない方を掘り起こすだとかして、なんとかそれを埋めたいと言っていたんですが、それは一向に進まない。それならば僕はこういう養成する学校をしっかりと整えていくことが国の役割じゃないですかということを厚労省や総務省へ言っていた。それから、介護処遇改善で賃金を多少、今回も上がりましたが、上げたところで人材が確保できるわけではない。環境を整えるのが国の仕事なんです。それを言って、環境を整えるため、学校維持するためには国の支援をしっかりとくれということを言っているが、なかなか通用しない。それは、都道府県にお金を国から権限移譲でばら撒いているから、そこの都道府県の資金を使って支援を今後できるならやってくれ、と。だから北海道行ってくれと言われて、東京から帰ってきて今度北海道行ったら、学校の運営支援にはお金は出せませんと言われた。にっちもさっちも行かないわけです。そうしたら、介護学生を確保するしかないということの結論になった。そこで、今教育長が話したようなこれからの展開をしていながら、なんとか 40 人に近づけていく努力をしていく。それで、40 人入れても 3000 万の赤字は出ます。それが最高なんです。だからそこで、この介護学校が栗山にどんな好影響を及ぼすか、役割を担うかというところをしっかりと議論した上で存続するか、しないかを判断したいと思っています。それに見合う役割を介護学校が担ってくれば、福祉のまちの栗山として、存続してもいいのではないかと、というようなことだと僕は受け止めている。今回ケアラー支援条例もできるし、その上でもう 1 回、町民の皆さんに問わないとまらない時期が来るかなと思っています。

教育長：その 3000 万というのが、この介護というのは永劫続くものですので、町に対してどれだけ貢献できるかとか、例えば全道から集まってきたりしていますから、それが栗山町で、その人材が働いてくれるとするならば、今言った 3000 万は将来的には、という形を一つ片隅に置いていただければ。

町民：小林酒造の赤レンガの酒蔵の活用がありますよね。錦の方でも赤レンガ倉庫を活用するようなことが書いてあるのですが、どちらかにすればお金がかからないのでは。後は、このケアラーカフェや、交流の集いの場がありますが、それも一緒にして、3 つの施設を

1つにできるという話です。

町長：まず栗山駅南交流施設については、都市再生計画事業という駅前再開発の事業に今取り掛かっている。5年計画の中で区域も決まっている。その中にこのレンガ倉庫があります。ここは、賑わいの拠点にしていくというのが目的の施設です。それは国の補助を受けて、有利な借入金を借りてやってくるのですが、今言われた、錦の小林酒造の赤レンガの活用、これはやはり我々も今、検討中です。言われたようなことは本当に分かります。やはりこれ以上町が抱えていく施設を整備すれば、それだけ維持管理にお金がかかっていくわけです。これから人口減少がどんどん進んでいく中で、またそれぞれ町民の皆さんの負担が増えていくわけです。ですから、効率的な施設の活用をしなきゃいけないということが1つと、むやみに町の施設を増やさないというところが、これからの行財政改革のテーマとしてあることになっていますので、このレンガ倉庫と、小林酒造の酒蔵の活用についても、これから町があそこを経営するということにはならないと思っていますので、しっかり民間が活躍できる場を作ることが、一つの活用策であります。あそこは歴史的建造物の貴重な建物ですので、小林酒造さんがもう使わないからということで、壊してしまうことではなくて、何か民間の力を借りながら活用していけないかということをしっかり議論していくことにしておりますので、全て町がやっていくことにはならないと思っています。

19：55 閉会